

弘法大師の悉曇学(一)

初 崎 正 純

悉曇(siddhan)は西暦七、九世紀頃に流行した文字で、仏教經典の原本にも使用せられ、特に密教徒は梵字を大切にし、そして日常その真言・讃頌を唱えるから、古来それを必須の基礎学とし、悉曇を知らぬ学者には「半真言師」の汚名を冠した程である。

わが国では真言・天台の両密宗がこれを伝承し、その分野も梵字の読み書きから、一字一字に關しての教理的解釈、更には文法的方面に及ぶが、悉曇は日本語に比し、言語体系が異なる上、文献も不備不完全で、あまり語学的面は進歩がない。その結果、後には多勞少功の悉曇学に力を入れる密教徒に対して「悉曇・声明愚僧の役」等の言辭も聞かれる——が。一千百有余年に亘り師資相承し、ひたむきに研鑽を累積して來られた先哲の心を偲び、それが究極には仏教經典の根原的理解に直結し得るとの敬愛の念から發したことを思えば、われら末徒は襟を正して、その努力に對し真に感謝しなければならぬ。

日本に梵字・梵語に關しての知識が移入したのはいつ頃か、それは仏教の傳來當時に溯るが。その普及は、聖武天皇の天平八年(七三六)に來朝したインド僧 Bodhisena (七〇三—七六〇)、および³仏哲の南都大安寺における梵学教授の後である。そして仏哲の悉曇章(梵字帖)は江戸時代の頃まで伝写せられたが、その梵字帖が弘

法大師(七七四—八三五)にいか程の感化を与えたかは明かでないが。

かの延暦二十三年(八〇四)に入唐して長安(現在の西安)に遊學し、不空三藏の嫡弟惠果阿闍梨(七四六—八〇五)より金剛・胎藏兩部の密教を授かり、なお同門の慧琳阿闍梨(七三八—八二〇)から悉曇学を習得して大同元年(八〇六)に帰朝せられた。その諸來目錄に見る二一六部四六一卷中、梵字關係の文献が四二部四四卷もある点から、弘法大師の斯学に對しての努力が窺える。更に「梵³字悉曇字母並釈義」一卷、承和二年(八三五)正月二十二日付の三業度人の官符中、声明(悉曇)業一人の下に「梵³字悉曇章一部二卷を書誦すべし」等の文を指した「大悉曇章」二卷の著書が現存し、これが弘伝の功績も大である。

密教の基礎学としての悉曇は、弘法大師が當時世界文化の中心地、唐の長安より直接組織的に移植せられ、はじめて日本に根を下したが、その悉曇字母の記号(ānāṅka)の数は古來より多少の相違がある。しかし根本的には玄奘三藏の「西域記」卷二における「原始乘則四十七言也」で、十四母音・三十三字音を以て構成し、その順序は左の通りである。

a ā i u ū rī ri ji e ai o au (14母音)

ka kha ga gha ṇa ca cha ja jha ṇa ja ṭha ḍa dha ṇa ta tha da dha na pa pha ba bha ma ya ra la va śa ṣa ha (33字)
その他、古來の悉曇章の記述を見るに、字母の配列が異なるゆえ、これを整理し分類せば次の六種になる。

(一) 母音中 rī ri ji の四を除き au の次に ai, aī を加え、子音の末に ṇa 等を付して四十六字。(「方広大壯嚴經」大正藏

三・五五九c)

- (2) 子音末の *ya* に代え *la* 字を置き、他は大壮嚴經に同じ。
〔ジャイナ教所伝〕 G・Bühler: Indische palaeographie. 2 参
照)

- (3) *aa i i u u e e o o au* の十母音を記し、*au* の次に「於十
四音是究竟也」の文を示し、そして *an aṅ* 等の字母をあけ、
子音の *ka~la* まではジャイナ教の所伝に同じであるが、その
後に *ri pi li i* の四母音を配して五十字。〔涅槃經〕大正藏
十二・六五三c)

- (4) 母音十四は西域記の配列法に同じ、他は大壮嚴經の順序で
五十字。〔金剛頂經釈字母品〕大正藏十八・三三八b)

- (5) 方広大莊嚴經に基き母音十二を列ね、その後 *ri pi li i*
の四母音を加え、子音三十四の他に *llam* を (*ssa* の前に) 付
し五十一字。〔悉曇字記〕大正藏五四・一一八七b)

- (6) 字数は悉曇字記に同じで、母音は西域記の配列に等しい。
但し「末後二字 (*llam ka*) 不入其教」であるから、悉曇章と
しての使用は四十九字。〔南海寄帰伝〕大正藏五四・二二八b)
以上の六種類中、弘法大師の伝承せられた悉曇章は、第四項にお
ける「金剛頂經釈字母品」の系統にして、不空三藏の所伝に他なら
ぬ——が、その悉曇章を見るに、円行僧都(七九八—八五二)の本
に同じで、はじめに *siddham aksarāḥ namah sarvajñāya siddham*
等の文字を記して、これが題目であると注し、次にその字母が配し
てある。悉曇の配列法も、かの「一切経音義」および「西域記」卷
二の所伝が十二章であるのに対して、弘法大師は十八章の形式を伝
承せられた。これ義浄・智広両三藏の本に同じで、十二章は本、十

八章の中、八と十四章に至る七章が、一と七章にあげた文字に
字の半体を加えることを教えるゆえ、九と十四章までの六章を省略
したもので、その悉曇配列法は誤りでない。

なお梵字は朴筆で書かれた——が、日本の国語学上、最も興味の
ある「いろは」歌・五十音図は、弘法大師の作には疑問もあるが、
ア・イ・ウ・エ・オ・カ・キ・ク・ケ・コ等の五十音は悉曇の音を
整理したもので、その流れを汲む五大院安然僧正(八四一—八九
七)をはじめ当時の悉曇学の巨匠により作成せられたことは否定で
きない。それは高野山常善院心覚僧正(一一七一—一一八〇)の梵
語辞典「多羅葉鈔」三卷が「いろは」の順序で記してある点からも
注目せられるが、わが国語学の方面における弘法大師の功績は甚大
である。

- 1 ヴェトナム僧にしてその世寿は不明。(慈覚大師讃仰集、一
五三頁参照)

- 2 不空三藏の弟子で、建中の末年(七八三)と元和元年(八〇
七)に亘り、長安の西明寺に住して「一切経音義」(大正藏五
四・四七〇a 収載)を著作した中国の学僧。

- 3 弘法大師全集第二輯七二四頁収載。

- 4 同上第五輯三九八頁参照。

- 5 大正藏五一・八七六c。

- 6 弘法大師の弟子にして、その悉曇章は大正藏八四・三九二b
収載。

- 7 〔南海寄帰伝〕(義浄訳) 大正藏五四・二二八b、〔悉曇字記〕
(智広作) 大正藏五四・一一八七b 参照。